



対がん協会報

1部70円(税抜き)

第635号

2016年(平成28年)
4月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な
内容

- 1、2面 2016年度事業計画・予算
- 3面 厚労省委託事業報告書まとまる
- 4、5面 2014年度がん検診の実施状況より
- 8面 RFLJ10周年始動

財政基盤強化目指し、堅実予算

検診のあり方考える部門、RFL、がん教育など重点

日本対がん協会2016年度事業計画・予算

日本対がん協会は2016年度の事業計画と予算案をまとめ、3月10日に開催した理事会で承認された。

2016年度の重点事業としては、協会内に新たにがん検診研究部門を設ける。全国のグループ支部で実施している年間延べ約1100万人のがん検診データを生かして、今後のがん予防、がん検診のあり方を考えていく。また、10周年を迎えるリレー・フォー・ライフや、さまざまな啓発活動、学習指導要領の改訂を視野にいれて、全国の学校現場で需要が高まっているがん教育、相談事業やセミナー開催などががん患者支援、海外奨学医制度の拡充な

どの専門家支援にも重点をおく。

これらの活動を進めるにあたっては、これまで以上にグループ支部と連携していく。

安定的な寄付収入増に注力

16年度予算の経常収益は4億6253万円を見込み、前年度予算より1億1347万円の減、比率で19.7%減少した。経常費用は4億6871万円で前年度予算から1億1315万円減、比率で19.4%減少した。収益の中で、対がん協会のさまざまな活動を支える屋台骨である寄付収入は3億5800万円(前年比5.7%減)と見込んだ。

15年度は個人や企業の大型寄付があったため、財務状況はやや持ち直す見込みだが、慢性的な赤字体質を脱したとは言えず、大型寄付が無くても最低限得られると見込まれる寄付額を算定した上で、それに見合った堅実な予算編成とした。

年々高まる日本対がん協会への社会的ニーズに応えるために、財政基盤の強化は喫緊の課題となっている。16年度は企業への寄付依頼に一層力を入れるとともに、協会の弱点である個人寄付、マンスリーサポーターの拡大に注力していく(2面にその他の主な事業計画)。

新規事業

【将来の検診を考える研究】

協会内に新たに検診研究部門を設ける。がん罹患状況や、厚生労働省のがん検診の指針が変わったことから、協会としても将来の検診のあり方を研究する。

初年度は、厚生労働省の補助事業「わが国におけるがんの予防と検診の新たなあり方に関する研究」(主任研究者=津金昌一郎・国立がん研究センター社会と健康研究センター長)の分担研究として、「現場の実態に基づく検診のあり方に関する研究」(分担研究者=垣添忠生会長)をスタートさせる。

日本人のがんの罹患状況が変わりつつある中で、どのような年代を対象に、どんな方法でがん検診を実施するのが合理的なのかを考える。人口構成の予想や生活習慣などの変化に伴うがん罹患の予測に加え、グループ支部の実施する年間約1100万人のがん検診データを分析し、検討する。

既存事業の拡充

【海外奨学制度】

若手医師の海外研修として定着してきた米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンター(2人)への研修に加え、新たにシカゴ大学医学部(1人)での1年間の研修を実施する。米国での研究助成に加え、帰国後の奨学制度経験者のネットワークを構築してサポートする。

5年目となるがん研究助成「プロジェクト未来」は、16年度も応募内容を精査しながら実施する。研究内容をホームページで公開したことにより、がん医療の進化を求める支援者からの応援ムードが高まっている。

いずれもリレー・フォー・ライフ・ジャパンの寄付金をもとに行う。

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

主な継続事業

ピンク、リレー、がん教育、ホットライン

多彩な活動を展開

ピンクリボンフェスティバル

東京でスマイルウオークとシンポジウムを10月に開催し、乳がんの早期発見、早期治療の大切さを伝える。

スマイルウオークは、日本橋、丸の内、表参道の3コースで実施。シンポジウムは、乳がん専門医が最新治療情報を提供するほか、精神腫瘍医による心のケアについての講演などもプログラムに盛り込む。啓発イベント以外では、昨年1万5千点を超える応募があったピンクリボンデザイン大賞を今年も開催。10月1日に入賞作品を発表し、デザインのグランプリ作品は「メッセージポスター」として交通広告などに活用する。

リレー・フォー・ライフ (RFL)・ジャパン

16年度は新たに苫小牧、高松、山口でリレーイベントを開くほか、2カ所でも新規開催を検討している。一方、中止も1カ所あり、差し引き51カ所での開催となる見通し。

16年度、RFLジャパンは10周年を迎える。①参加者、実行委員などのボランティア、支援企業・団体と共に過去の10年を思い起こしくRemember> ②共に生きてきたことを讃えて祝う<Celebrate> ③患者支援に加え、未来のがん医療支援を見据えてRFLを展開する<Fight Back>というRFLの三つのテーマに沿って、4月に東京で記念イベントを開く。各地ではリレーイベントの際に10周年を掲げて盛り上げを図る。10周年の広報活動によりRFLの認知度をさらに高める。

ほほえみ基金の活動

協会オリジナルのがん検診無料クーポン券の発行事業を継続する。対象は乳がん、子宮頸がんのほか、女性死亡者数1位の大腸がんも試験的に首都圏に限定して発行する。患者向けセミナーも年6回程度開催する。最新の医療

情報や美容をテーマにするが、プログラムのブラッシュアップや医療従事者の参加なども検討する。基金の一部はピンクリボンフェスティバルやがん関連団体助成、がん相談、乳がんリスク層別化研究事業にも充当する。

がん教育基金の活動

協会が進めてきた小中高校生向けのがん教育は全国的に広がっており、16年度は、ニーズの高いがん教育の副教材作成に重点を置く。新たな動画副教材を作成し、DVD化するとともに、協会ホームページ(HP)からダウンロードしたり、スマートフォンでも見られるようにしたりする。テキストの小冊子も作る予定。学校現場からの要望に応じて、教諭向けの指導案、学校医向け指導案の作成を検討する。

禁煙教育は、モデル授業をDVDにして、HP上でも視聴可能にする。

がん征圧月間と全国大会

協会の提唱による「がん征圧月間」(9月)の中心イベントとなる「がん征圧全国大会」を9月9日、京都で開催する。若者へのがん啓発を目的とするがん征圧ポスターデザインコンテストは今年で4回目。今回からは、対象を高校生にも広げ、より幅広い層への訴求を目指す。最優秀賞受賞者は全国大会で表彰する。

がん征圧に顕著な功績のあった個人・団体に対して「日本対がん協会賞」、特別賞の「朝日がん大賞」を贈呈し、9月のがん征圧全国大会で表彰する。

研究事業

子宮頸がん検診の未受診者対策

米国や豪州の2倍という子宮頸がん死亡率を少しでも引き下げるべく、医師のいない地域での検診機会増加を図るため、自己採取HPV検査の有用性を検討する研究事業などを行う。

乳がんリスク層別化研究事業

がんの発症リスク層別化は欧米でも

注目され、欧州では乳がんを対象に大規模研究が着手されている。16年度はいくつかのグループ支部の協力を得て、乳がん検診受診者に、定期検診の有無、食生活、運動量などのアンケートを実施。その分析をするとともに、がん検診データと照合などをする。日本乳癌学会、国立がん研究センターがん予防・検診研究センター、乳癌検診学会と連携して進める。

がん相談

がん相談ホットライン

看護師、社会福祉士など17人でローテーションを組み、祝日、年末年始を除く毎日、相談に応じている。がんへの関心の高まりを反映して15年度の相談件数は1万2千件を超え、過去最高となる見込み。

がん専門医による医師相談

医師による無料相談は他に例が少なく、各部位ごとにベテランのがん専門医9人が担当している。16年度は電話を中心に展開し、面接と合わせると年間200回、延べ900人の相談を見込む。

厚生労働省からの委託事業

厚生労働省の「がん対策推進総合研究推進事業」の委託を受けた「がん研究の成果等普及啓発事業及びがん医療均てん化推進事業」の3年目。

厚生労働科学研究(がん政策研究)に研究課題が採択された研究代表者と研究分担者が、その成果を「一般に分かりやすく伝える」「関連分野の専門家・がん医療従事者に解説して医療水準の地域間格差をなくす」という二つの目的のために、各地で開催する発表会と研修会をサポートする。

また研究代表者が成果を発表する「厚生労働科学研究 がん政策研究成果発表会」を17年2月に開催する。研究の内容や発表会・研修会の告知は協会ホームページに掲載し、最新のがん研究について案内する。

平成27年度「がんと診断された時からの相談支援事業」 報告書まとまる

～地域統括相談支援センターのあり方やがん相談支援体制のあり方について提言～

日本対がん協会では、このほど、厚生労働省から委託を受けた「がんと診断された時からの相談支援事業」の平成27年度報告書をまとめた。

がんと診断されると、患者・家族は多くの悩みや不安に直面する。厚生労働省では、全国約400のがん診療連携拠点病院にがん相談支援センターを設けて対応しているが、がん患者・家族の悩みや不安が多様化し、がん相談支援センターだけでは対応しきれない場合が出てきていた。そのため、厚生労働省は、がんに関する様々な相談に対応する「地域統括相談支援センター」を設置する事業を2011年度から始めたが、その周知が十分でなく、その実施状況もよくわかっていなかった。

そこで、この地域統括相談支援センターの普及と活性化の方策を探るため、厚生労働省は14年度から15年度の2年間の厚生労働省委託事業「がんと診断された時からの相談支援事業」を日本対がん協会に委託した。

日本対がん協会では1年目の14年6月に、がん相談にかかわる医療者やがん経験者からなる「がんと診断された時からの相談支援検討委員会」を設置。「地域統括相談支援センター」を設置した先行自治体の訪問調査や、47都道府県への「がん相談の支援体制」に関するアンケート、がん経験者への相談ニーズを探る調査などの各種調査を進めな

がら、「地域統括相談支援センター」を中心に、がん相談支援体制のあり方について、委員会で検討を重ねた。平成27年度報告書は、この間の調査に基づき、委員会で14年6月から16年2月まで計11回にわたって議論を重ねてきた結果をまとめたものだ。



議論を重ねる検討委員

地域統括相談支援センター 全国に14カ所、うち11カ所は病院外

地域統括相談支援センターを先行設置した自治体への訪問調査は、1年目の14年度に、13年度までに設置が判明していた宮城県、千葉県など9カ所で実施したが、15年度は15年5月に実施した47都道府県アンケートなどで、地域統括相談支援センターもしくは類似組織を設置していることがわかった京都府、石川県、福井県、島根県、佐賀県、長崎市の6カ所で実施した。

その結果、15年度までに「地域統括相談支援センター」として設置された施設が全国で14カ所あり、このうち

訪問調査した13カ所中11カ所が拠点病院内のがん相談支援センターとは異なる病院外にあり、ピアサポーターの養成や拠点病院のがん相談支援センターと行政との連絡・調整など、地域の事情に応じた様々な活動をしていることがわかった。

また、がん経験者への相談ニーズを探るインターネット調査などから、求められている相談内容は、必ずしもがんに特化したことばかりではなく、医療、心、お金、仕事など多岐にわたり、それに対応できる窓口が求められているが、相談窓口への認知度が低く、活用されていないことがわかった。

地域の相談支援機能 確認用のチェックシート作成

こうした調査結果や検討委員会での議論に基づき、報告書では、①がん相談の現状と課題②地域のがん相談の充実に向けて③よりよいがん相談への提

言——を示した。「地域のがん相談の充実に向けて」では、視察した地域統括相談支援センターや類似組織の相談機能の一覧表や、各地域のがん相談支援機能を確認できるチェックシートを掲載。このチェックシートを活用するなどして各都道府県が地域の相談支援機能の強化を図ることや、地域全体の相談支援機能の認知度を高めるために、がん診療連携拠点病院で初診時に担当医からがん相談支援センターを紹介することを徹底することなどを提言した。

また、各種調査の詳細は、平成27年度「がんと診断された時からの相談支援事業」に関する報告書資料集に収載しており、いずれも、日本対がん協会内の当事業サイト「がんと診断された時からの相談支援事業」(<http://www.jcancer.jp/can-navi/>)から、昨年度の報告書も併せてダウンロードできる。



報告書と報告書資料集

2014年度 がん検診の実施状況

検診受診者は延べ1159万2385人

前年度より34万人増 2年連続増加

「2015年度版・がん検診年次報告書」より 初めて年代別集計も

日本対がん協会は、グループ支部の協力を得て、支部が実施した2014年度のがん検診の実施状況をまとめた。46支部のうち、がん検診(胃、子宮頸、乳、肺、大腸、子宮体、甲状腺、前立腺、肝胆膵腎の9種類)を実施している42支部の実施状況の集計で、2014年度のがん検診受診者数は延べ1159万2385人で、前年度より34万3944人の増加となった。増加は2年連続で増加率は3.1%だった。

受診者が増えたのは、肺と大腸、甲状腺、前立腺、肝胆膵腎の5つの検診で、特に増加が目立ったのは肺がん検診。前年度より24万1068人(7.7%)増えて、336万5155人だった。次いで大

腸がん検診が同6万8939人(2.8%)増えて249万927人になった。前立腺がんも4万8323人増えて、42万3851人となった。

一方、発見したがんの数は延べ1万3688人(胃がん検診の内視鏡検査を含む場合)で、前年度より111人(0.8%)減った。一般的には受診者数が増えると発見がん数も増えるが、今回は逆の結果となった。

発見数が減ったのは、胃、子宮頸、大腸、甲状腺の4つの検診。胃がんは前年度より133人減って3073人(内視鏡検査を含む)、子宮頸がんは36人減って172人、大腸がんも127人減って3884人だった。この3つのがん検診

の中で、胃がんの発見率は0.13%と前年度と変わらなかったが、子宮頸がんは0.01%、大腸がんは0.16%とともに0.01ポイント下がっていた。

年代別集計でより詳しく把握

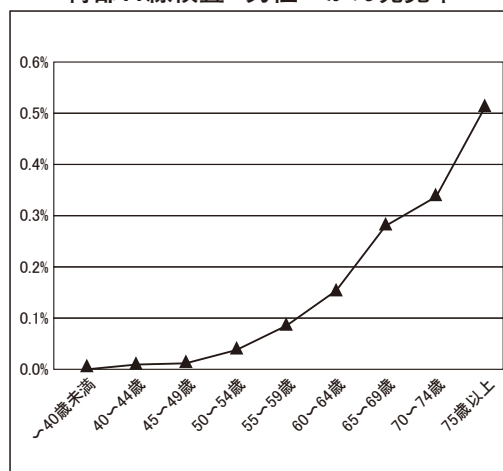
支部の協力のもと、今回から初めて年代別の受診者数と要精検者数、精検受診者数、発見がん数のデータも集計に加えた。人口構成の変化に伴い、がんの罹患状況も年代によって詳しく把握する必要があると考えたからだ。今後、検診データの集計と分析を進め、日本対がん協会に新たに設けた「検診の将来のあり方に関する検討会(仮称)」での議論に生かしていく。

	実施団体数	受診者数	前年度比	がん発見数	がん発見率
胃がん※	42	① 2,368,310	-9,711	3,073	0.13%
		② 2,330,391	-18,533	3,040	0.13%
	42	① 2,378,021	-	3,206	0.13%
		② 2,348,924	-	3,178	0.14%
子宮頸がん	42	1,316,047	-6,546	172	0.01%
	42	1,322,593		208	0.02%
乳がん	42	1,241,998	-24,153	2,989	0.24%
	42	1,266,151		2,960	0.23%
肺がん	42	3,365,155	241,068	1,599	0.05%
	42	3,124,087		1,546	0.05%
大腸がん	42	2,490,927	68,939	3,884	0.16%
	42	2,421,988		4,011	0.17%
子宮体がん	19	26,896	-1,283	36	0.13%
	18	28,179		28	0.10%
甲状腺がん	9	28,474	10,329	5	0.02%
	8	18,145		6	0.03%
前立腺がん	37	423,851	48,323	1,763	0.42%
	32	375,528		1,697	0.45%
肝胆膵腎がん	22	330,727	16,978	167	0.05%
	22	313,749		137	0.04%
合計		① 11,592,385	343,944	13,688	-
		② 11,554,466	335,122	13,655	-
		① 11,248,441	-	13,799	-
		② 11,219,344	-	13,771	-

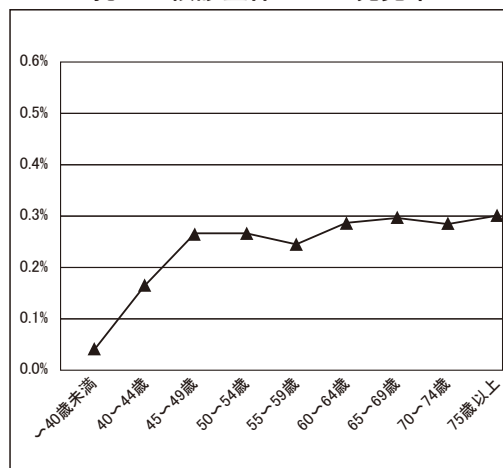
日本対がん協会支部のがん検診の実施状況(上段が2014年度、下段が2013年度)

※「胃がん」と合計の①は胃がん検診の内視鏡検査を含み、②は含まない

胃部X線検査・男性～がん発見率



乳がん検診全体～がん発見率



2014年度 がん検診の実施状況

5つのがん検診(胃、子宮頸、乳、肺、大腸)

受診者前年度より26万9597人増加

胃、子宮頸、乳、大腸で気になる精検受診率の低下

国が指針を設けて受診を勧める5つのがん検診(胃、子宮頸、乳、肺、大腸)について、日本対がん協会グループ支部の状況を概説する。

2014年度の受診者数は合わせて延べ1078万2437人で、前年度より26万9597人の増加となった(増加率2.6%)。各がん検診の受診者数や発見がん数は表のとおりだが、気になるのは、肺がんを除く4つのがん検診で精検受診率が下がっている点だ。中でも胃がん検

診では、前年度の80.69%から78.08%に下がっている。子宮頸がん健診も同81.62%から79.72%に、乳がん検診も88.43%から87.14%に低下していた。

精密検査はがん発見に欠かせない。「がん発見のチャンス」を逃さないためには、要精検者への啓発がいかに大切かが改めて認識された。

今春厚労省の指針が改訂された胃がん検診では、検診対象が従来の40歳から50歳に引き上げられ、検診間隔

が1年から2年に延長されたことにより、がん発見が遅れることが懸念される。今回から実現した年代別の集計から年代別の状況をみると、年代が上がるにつれてがん発見が急増する様子が見て取れた。検診間隔が伸びたことによる影響についても今後の継続的な検証がかかせない。

乳がんでは、検診の受診者数が124万1998人で前年より2万4153人(約1.9%)下がったにも関わらず、発見したがん数は、29人増えて2989人になった。がん発見率は0.24%で、前年より0.01ポイント増えていた。乳がんの増加傾向は変わっていないことが検診のデータからもうかがえる。また、年代別のがん発見率をみると、60代後半が最も高く、0.3%、次いで60代前半と70代前半が0.29%と並ぶ。40代後半と50代前半はともに0.27%だった。従来日本人女性の乳がんの発症は40代後半から50代がピークとされてきたが、近年は60代以降、閉経後の乳がんも増えつつあり、罹患状況が欧米の傾向と似てきたとも指摘されている。今回の年次報告だけでは結論は出せないが、欧米と類似の傾向がうかがえる。

5つのがんの集計結果については協会報でも順次掲載していく。「2015年度版・がん検診年次報告書」についてのお問い合わせは電話03-5218-4771(がん検診研究グループ)まで。

5大検診実施状況

上段が2014年度、下段は2013年度の数値

	受診者数	前年度比	要精検率	精検受診率	がん発見数	がん発見率
胃がん※	① 2,368,310	-9,711	7.20%	78.08%	3,073	0.13%
	② 2,330,391	-18,533	7.27%	78.11%	3,040	0.13%
	① 2,378,021	-	7.56%	80.69%	3,206	0.13%
	② 2,348,924	-	7.58%	80.76%	3,178	0.14%
子宮頸がん	1,316,047	-6,546	1.58%	79.72%	172	0.01%
	1,322,593		1.44%	81.62%	208	0.02%
乳がん	1,241,998	-24,153	5.36%	87.14%	2,989	0.24%
	1,266,151		5.54%	88.43%	2,960	0.23%
肺がん	3,365,155	241,068	2.08%	77.70%	1,599	0.05%
	3,124,087		2.12%	77.07%	1,546	0.05%
大腸がん	2,490,927	68,939	6.21%	67.77%	3,884	0.16%
	2,421,988		6.28%	68.91%	4,011	0.17%
合計	① 10,782,437	269,597	-	-	11,717	-
	② 10,744,518	260,775	-	-	11,684	-
	① 10,512,840	-	-	-	11,931	-
	② 10,483,743	-	-	-	11,903	-

※胃がん検診の数値は、上段の①にはX線検査と内視鏡検査を合わせた数値を、下段の②にはX線検査のみの数値を掲載している。

■胃がん検診X線検査 男女合計

	～40歳未満	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75歳以上
受診者数	147,471	235,464	208,496	218,478	234,660	317,171	366,349	301,945	297,761
要精検者数	4,639	9,737	10,271	13,605	17,327	26,172	31,619	27,019	29,020
精検受診者数	2,890	6,260	6,543	8,982	11,927	19,958	26,389	23,577	25,656
がん発見数	6	27	31	66	145	340	661	665	1,094
要精検率	3.15%	4.14%	4.93%	6.23%	7.38%	8.25%	8.63%	8.95%	9.75%
精検受診率	62.30%	64.29%	63.70%	66.02%	68.83%	76.26%	83.46%	87.26%	88.41%
がん発見率	0.00%	0.01%	0.01%	0.03%	0.06%	0.11%	0.18%	0.22%	0.37%
陽性反応の集中度	0.13%	0.28%	0.30%	0.49%	0.84%	1.30%	2.09%	2.46%	3.77%

2016年度のがん征圧スローガン 「大切なあなたと一緒に がん検診」 鳥取の三上慶子さんの作品に決定

2016年度のがん征圧スローガンが決定した。同スローガンは日本対がん協会が毎年グループ支部を対象に公募しており、今年は37支部から176作品が寄せられた。対がん協会本部で開催した審査会の結果、最優秀賞1作品、優秀賞3作品が決定した。

【最優秀賞】

「大切なあなたと一緒に がん検診」
鳥取県支部(鳥取県保健事業団)
巡回健診課 三上慶子さん

身近にいる大切な人を思うあたたかい気持ちを感じさせるスローガンは、ご自身の体験を通して生まれた。

「父を亡くしたことがきっかけで、自分のためだけでなく、自分を大切に思ってくれている家族のためにもがん

検診を受けてほしい、と思うようになりました。自分ひとりではなく、家族や友人など大切な人と一緒に検診を受けてほしいと思います」

【優秀賞】

「がん検診 気づいた今が 受ける時」
茨城県支部(茨城県総合健診協会)
診療部 健康管理課 小林むつみさん

「最近テレビや雑誌などで、がんやがん検診に関する情報を目にすることが多くなりましたが、それを他人事と思わず、その情報に『気づいた時』が検診受診の絶好の機会ではないかと思ひ、スローガンにしました」

【優秀賞】

「あなたから 受けて 広めてがん検診」
福井県支部(福井県健康管理協会)

健診サービス課 春木美和子さん

「全国はもちろん、福井県も受診率50パーセントの目標達成にはまだ程遠い状況です。受診率を向上させるためには自分が受診するだけでなく、周りの人にも伝えて広げてほしいという思いを込めました」

【優秀賞】

「がん検診 体の声を聞く一歩」
山形県支部(やまがた健康推進機構)
南陽検診センター 三浦由起さん

「忙しいと、自分の体が声を発していても聞こえないふりをしたり、自分のことを後回しにしがちですが、『自分だけは大丈夫』と思わず、自覚症状がないうちに定期的に検診を受けてほしいという願いを込めました」

▶ ほぼえみセミナー「乳がん治療の最新情報2016」 最新の治療法や乳房再建をくわしく解説



講演する岩田広治先生

日本対がん協会は3月13日、東京・千代田区の有楽町朝日スクエアで「ほぼえみセミナー ～乳がん治療の最新情報～」を開催した。このセミナーは使いみちを乳がんに関する活動に限定した「ほぼえみ基金」に寄せられた寄付金で開催され、84名が参加した。

今年のテーマは乳がん治療の最前線と乳房再建。まず、愛知県がんセンター中央病院副院長兼乳腺科部長の岩田広治先生が、「知って得する乳がん治療最前線」と題して講演した。

最近話題を呼んだ10年生存率についても触れ、「乳がんでは10年生存率が5年生存率に比べやや下がることを

悲観している人もいるが、5年生存率も年々高くなっている。生存率の改善は早期発見と治療の進歩の証なんですよ」と前向きに話した。

HBOC(遺伝性乳癌卵巣癌症候群)への対応の仕方や、新規薬剤・治療戦略の開発の現状、就労支援などにも言及。一部の乳房再建方法が保険適用になったこともあり、愛知県がんセンターでも乳房切除後再建を選ぶ人が37%にも増えてきたことを紹介し、形成外科と連携した同時再建についてもわかりやすく説明した。新薬や新しい治療法を開発するために、臨床研究にぜひ参加してほしいと呼びかけた。

続いて、乳房再建手術を数多く手がけているセルポートクリニック横浜院長の辻直子先生が、「乳房再建—各再建法の特徴とその詳細」と題して講演。豊富な実例写真を使って説明した。

辻先生は従来から行われている、自分のお腹や背中下の皮下組織や深部組織のかたまりを乳房に移植する「皮弁法

と、シリコンなどの人工物を注入するインプラント法について、その良い点悪い点を詳しく解説。その上で、同クリニックで実施しているCAL(Cell-Assisted Lipotransfer)という、脂肪由来の幹細胞密度を高めた移植用脂肪を使った脂肪注入法による再建術について詳しく説明した。

参加者は30代から60代と幅広く、終了後のアンケートでも「自分が受けた治療を納得する上で、本当に素晴らしい内容だった」「患者が自分だけではないという実感が持てて勇気づけられた。再建は希望です」と、前向きな言葉が並んでいた。



にこやかな辻直子先生

日本対がん協会賞、朝日がん大賞 候補者募集

今年度の「日本対がん協会賞」と「朝日がん大賞」の候補者の募集を始めました。自薦・他薦は問いません。締切は6月20日(月)必着です。奮ってご応募ください。

「日本対がん協会賞」は、対がん運動に功績のあった個人および団体を顕彰する賞で、検診の指導やシステム開発、第一線の検診・診断活動、がん予防知識の普及や啓発活動などに、多年にわたって地道な努力を重ねた個人や団体が対象です。

「朝日がん大賞」は、日本対がん協会賞の特別賞として2001年に朝日新

聞社の協力を得て創設しました。「がん予防」を中心に、がん医療・研究分野、画期的な医療機器の開発など幅広い分野を対象にしています。また患者・治療者を支える活動も視野に入れていきます。活動期間は問わず、第一線で活躍している個人・団体が対象です。

いずれも年度賞で、協会賞は個人・団体各数件、がん大賞は1件で、日本対がん協会内の選考委員会で選考します。受賞者は、9月1日付けで発表、9月9日に京都市で開かれるがん征圧全国大会で表彰します。協会賞には盾と記念品、朝日がん大賞には、盾と副

賞100万円を贈ります。朝日新聞紙上でも紹介されます。

応募にあたっては、応募用紙を日本対がん協会のホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)からダウンロードし、必要事項を記入の上、〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13階 日本対がん協会「日本対がん協会賞」係に郵送してください。

問い合わせは、「日本対がん協会賞」係(電話03-5218-4771)まで。

「第39回 保健師・看護師研修会」を開催 2日間にわたって講演やワークショップ

3月3日、4日にかけて東京・千代田区の有楽町朝日スクエアで保健師・看護師研修会を開催した。日本対がん協会が主催し、今回で39回を数える。各支部、自治体、関連団体等に所属するがん検診に携わる保健師や看護師、事務員など約70名が参加した。

初日は、日本対がん協会相談支援室の荒木光子さんから、がん相談ホットラインに関する報告からスタートした。相談の原則と留意点や、相談者の思いと悩みに関してなど、参加者は傾きながら聞いていた。

続いて、山王病院副院長・呼吸器センター長の奥仲哲弥先生が「肺がん診断・治療の現況と禁煙教育」と題し、最新の診断法や、抗がん剤、分子標的治

療など最新の肺がん治療に関してや、喫煙が健康に及ぼす害などについて講演した。肺がんは高齢者に多く、難治がんであることから5年生存率が低くなること、がん治療に関する喫煙のデメリット、COPD(慢性閉塞性肺疾患)に関してなど、肺がんや喫煙に関するさまざまな話題を、時に笑いを交えながら熱心に語った。

続いて、厚生労働省健康局がん・疾病対策課の高橋宏和課長補佐が「がん検診の最近の動向について」と題し、現状、国のがん対策の歴史、がん検診の利益・不利益とはなにか、がん検診受診率向上への取り組みについて、がん対策加速化プランについてなど、資料を見ながらわかりやすく講演した。

支部の事例紹介として、宮城県支部看護課の佐藤真由美技術主幹が「マンモグラフィ単独検診について～宮城県対がん協会の取り組み」と題し、平成23年からマンモグラフィ単独検診を実施している宮城県支部の取り



厚生省の高橋宏和課長補佐

組みについて詳細に説明した。4月1日から「がん検診実施のための指針」が改定されることを受け、宮城県支部での具体的な取り組みが実務の参考になると、参加者たちはメモを取りながら熱心に聞き入った。質疑応答では、年間計画の立て方の工夫や、当日の受診者が想定を超えてしまった場合の対応とその予測、準備についてなど、日々業務に携わる担当者としての質問があった。

二日目は、ヒューマン・ギルド所属の日本アドラー・カウンセラー協会認定アドラー・カウンセラーの永藤かおる先生による「あなたと職場を大いに勇気づけよう！元気になる帰れる講座」と題したワークショップを行った。



情報交換会は和気あいあい

Relay For Life Japan 10th Anniversary

祝10周年!「命を讃え、子供たちの輝く未来に」をテーマに
過去最多となる全国50ヶ所以上の開催を予定

リレー・フォー・ライフ(RFL)は1985年、アメリカの一人の医師がトラックを24時間走り続けて寄付を募ったことから始まった。2015年には世界25カ国、約6000ヶ所で開催され、年間寄付は470億円を見込むグローバルながん患者支援チャリティ活動だ。

日本では、2006年の茨城県つくば市のプレ開催を経て、2007年兵庫県芦屋市から本格的にスタート。全国の実行委員や支援者たちに支えられ、2015年度は過去最多の約8万2千人が参加、支援者からは1億5千万円の寄付を見込むまでに成長した。

記念すべき10周年を迎える2016年



RFLJ2015青森

度は、過去最多となる全国50ヶ所以上の開催を予定している。今や社会問題ともいえる「がん」に向き合うチャリティ活動の価値と、これからの可能性を信じて熱心に活動する各地の実行

委員や支援者たちも、10周年に向けて心を一つにしている。

RFLJのリレーイベントは5月14、15日の熊本、和歌山を皮切りに、全国で開催される。

リレーフォーライフジャパン 2016 開催一覧

2016年3月31日現在決定分

日程	都道府県	会場
5/14(土)~15(日)	和歌山・和歌山市	和歌山公園 砂の丸広場
5/14(土)~15(日)	熊本・熊本市	白川公園
5/21(土)~22(日)	茨城・つくば市	研究学園駅前公園
5/21(土)~22(日)	京都・亀岡市	亀岡市役所市民ホール・駐車場
6/11(土)~12(日)	兵庫・神戸市	神戸震災復興記念公園 みなとのもり公園
6/25(土)~26(日)	青森・八戸市	長者まつりんぐ広場
7/23(土)~24(日)	青森・青森市	マエダアリーナ(新青森県総合運動公園)
7/30(土)~31(日)	山形・鶴岡市	鶴岡公園疎林広場
7/30(土)~31(日)	北海道・苫小牧市	オートキャンプ場苫小牧アルテン
8/27(土)~28(日)	北海道・室蘭市	道の駅みたら室蘭 隣接広場
9/3(土)~4(日)	兵庫・芦屋市	芦屋市立川西運動場・体育館・青少年センター
9/10(土)~11(日)	岩手・一関市	一関遊水地記念緑地公園
9/18(日)~19(月祝)	新潟・新潟市	新潟県スポーツ公園
9/24(土)~25(日)	宮城・仙台市	仙台国際センター交流広場
9/24(土)~25(日)	栃木・壬生町	壬生町総合公園陸上競技場※
9/24(土)~25(日)	愛知・岡崎市	暮らしの杜※
9/24(土)~25(日)	佐賀・佐賀市	どんどんの森公園
9/24(土)~25(日)	大阪・貝塚市	貝塚市民の森(コスモシアター)
10/8(土)~9(日)※	岐阜・岐阜市	岐阜大学医学部附属病院内ホスピタルパーク※
10/8(土)~9(日)	大分・大分市	大分スポーツ公園「大芝生広場」
10/9(日)~10(月祝)	大阪・大阪市	大阪市立旭区民センター
11/12(土)~13(日)	神奈川・横浜市	新横浜日産フィールド小机

※は予定

「10周年記念ロゴ」も決定

RFLJ10周年を盛り上げるため、「RFLJ10周年推進委員会」(共同事務局:日本対がん協会)が発足した。特設ページ(URL: <http://relayforlife.jp/10years/>)を開設し、応援メッセージや応援ソングなど10周年に関するさまざまな情報を発信している。

また、昨年11月に公募した「RFLJ10周年ロゴ」は厳選な審査の結果、柴田



今年度活用される記念ロゴ

始志さんの作品に決定。このロゴは「10周年を祝うキャンドル」がモチーフになっている。キャンドルの炎に

は「涙のしずく」のイメージを重ね、時に涙を流したり、希望を感じたり、いろいろな気持ちで歩んだ10年を表現。また、グラデーションの色合いと、ほほえみをイメージした文字下のラインで、「希望」を表現したという。

この10周年記念ロゴは、グッズや印刷物などに使用され、各地のRFLイベントを彩る予定だ。

4月16日、10周年記念セレモニーを開催

4月16日、RFLJ10周年記念セレモニーを東京・浜離宮朝日ホールにて開催する。このセレモニーでは、これまでの10年を映像で振り返りながら、トラックを歩くりレーウォークやルミナリエセレモニーなどRFLのリレーイベントを体験したり、パネルディスカッションや交流会を行う。サバイ

バー、家族、医療者、RFLジャパンを支援する企業・団体など、様々な立場の人たちが交流して10周年を祝い、次の10年、そして子供たちの未来のために何ができるのか、RFLのこれからについて話し合う。

翌17日にはRFLJキックオフミーティングも開催される。



RFLJ2015とちぎ